

Title	繰り返されざる旅 Version2.0 : 『キホーテ神父』 と『ドン・キホーテ』の比較に関して
Author(s)	鴨川, 啓信
Citation	Osaka Literary Review. 35 p.149-p.162
Issue Date	1997-02-10
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25419
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

繰り返されざる旅 Version 2.0

— 『キホーテ神父』と 『ドン・キホーテ』の比較に関して—

鴨川 啓信

ある物語を読む際に、別の物語と比較するというのはどういうことであろうか。例えばグレアム・グリーン (Graham Greene) の晩年の小説、『キホーテ神父』(Monsignor Quixote, 1982) は、そのタイトルから容易に思い浮かぶように、比較の対象としてセルバンテスの『ドン・キホーテ』が考えられる。もちろんタイトルの Monsignor という称号の方に目を向ければ、それが表すキリスト教信仰からの連想でグリーン作品群の文脈での比較、同じく聖職者を描いたものとの比較¹ や、宗教色が稀薄な小説でも人生に対する姿勢の点での比較² などから、実際先行する研究に見られるような作者の信仰や世界観の考察も可能である。

比較対象は、可能性としては様々な読みに合わせて無数に存在する。では1つの比較の対象を選ぶという行為は、複数の可能性の混沌の中に1つの基準点を定めることと言えるだろうか。グリーン『キホーテ神父』の登場人物(特にその名前)やプロット等を考えると、350年以上も時を隔てておりながら、その「キホーテ」の名のもとに結び付けられる『ドン・キホーテ』は、比較対象としてはわりと一般的である。というのもこの2つの物語は非常に多くの類似点を持っているからだ。それも前者の本文の中に、後者との類似点についての言及が繰り返し行われるという形で。言うなればこの二者の比較は、小説中に指定されている方向性。そういった状況の中、果たして『ドン・キホーテ』は『キホーテ神父』の読みの道標となりうるのであろう

か。

I

共にタイトルに「キホーテ」の名を冠するセルバンテスとグリーンの2つの物語では、そのプロットも即座にそれとわかる共通のもの、すなわち「キホーテ」が「サンチョ」と呼ばれる連れとともに、「ロシナンテ」に乗りスペインを旅して回るという筋である。そしてその旅の途上での様々な（滑稽な）事件を語っていく両物語で、また幾つかのエピソードが類似している。いやむしろ『キホーテ神父』のエピソードには、『ドン・キホーテ』のものを彷彿とさせるもの、後者を投射して読まれるものがあると言った方がよいだろう。一例を挙げると、キホーテ神父が銀行強盗で殺人犯として追われている男を、無罪を主張するその男の言葉を信じ、警察から匿い逃がしてやる事件は、ドン・キホーテがガレー船の囚人を逃がした話としばしば比べられる。またこのエピソードにおいて、助けた男に靴とズボンを盗られてしまうのも、身ぐるみを剥がれた騎士の場合と自然に重なってくる。こういった類似するシチュエーションやエピソードが、同一の大枠（プロット）の中にちりばめられているグリーンはこの小説を読むとき、『ドン・キホーテ』との比較について、そして先行・参照テキストとしての意識的適用について考察したい誘惑に駆られるものである。

ただし『ドン・キホーテ』の意識的適用は自明であり、その指摘自体は非常に陳腐なものである。類似している（と読者が気付く）エピソードが繰り返される中で、この小説の登場人物達自身もセルバンテスの物語との類似性について言及しているからだ。言及の多くはサンチョことエル・トボソの前市長によってなされるのであるが、キホーテ神父が好んで読む聖人の書物について、“They are your books of chivalry. You believe in them just as much as he [Don Quixote] did in his books” (31). のように比較をし、またかの有名なエピソードに基づき、“It wasn’t until he left his

village that your ancestor encountered the windmills. Look. Our task is easier. We have not thirty or forty windmills to encounter, we have only two” (84). と、風車を旅に立ちふさがる困難の象徴として話をする。ワインを飲むことに対してさえ先祖ドン・キホーテを引き合いに出してくる彼に、神父が立腹して指摘するように “talk about him [Don Quixote] at every opportunity” (139) という具合である。『キホーテ神父』の物語世界にも『ドン・キホーテ』の書が存在しており、類似性（あるいは意識的適用）は過度に確認されることとなる。

登場人物自身が別の物語との類似性を確認していくというのは、実に「キホーテ」のテキストに相応しいことと言える。ミシエル・フーコーがドン・キホーテを語って次のように指摘している。

現実には貧乏貴族の身の上である彼は、〈掟〉を定めている古い英雄譚に遠くから耳を傾けることによって、どうやら騎士になれるのにすぎないからだ。書物は、彼の实在というよりも義務である。何をなすべきか、何を言うべきか、さらに、彼が自分の由来するテキストとたしかにおなじ性質のものであることを示すためには、どんなしるしを自分自身や他人にあたえるべきなのか、そうしたことを知るために、彼はたえず書物を参照しなければならない。（フーコー 71）

ことあるごとに『ドン・キホーテ』に言及するキホーテ神父の旅は、「彼の道ゆきのすべては相似関係の探索である。」（フーコー 72）と解読されるドン・キホーテの旅と類似しているように思われる。確かに神父（そしてサンチョ前市長）は絶えず先祖の書物を参照し確認していく。前市長に「サンチョ」のあだ名を、乗り物に「ロシナンテ」の呼び名を当てはめ、ドン・キホーテの騎士道の書物に相当するものを持ち、先祖と同様に常軌を逸したとされる行為のために監禁されると、ドン・キホーテの境遇を自らのものとし次の展開をその物語から予測して、“I don't think they will try to burn my books.” (157) と心配する。死によって旅を終えるに至るまで神父は「キ

ホーテ」である。彼はまるで、『ドン・キホーテ』との相似を認めていくことで、「キホーテ」の旅を、物語を再現しようとしているかのように見える。

読者にとっても『ドン・キホーテ』との比較の一側面は、相似関係の探索である。そして例えば先の銀行強盗を逃がす件に関して、これを『権力と栄光』のウィスキー神父の行動と比較するのではなく、ドン・キホーテのものと比べることは、それが「キホーテ」の行動であるということに着目することだ。神父が繰り返し言及・確認する『ドン・キホーテ』の書との類似点、いわゆる「キホーテ」の記号が、小説『キホーテ神父』に表れていることを認めているのである。ただしその二物語の関係では、フーコーのドン・キホーテの考察の場合と異なり、「すべて」が相似なのではない。『キホーテ神父』で語られるエピソードは、それ自体『ドン・キホーテ』のものと完全な同一物ではない。相似を確認するのもそこに前提として相違があるからであり、現代の銀行強盗と370年程前のガレー船の囚人との間には明らかに距離がある。ドン・キホーテの様に、その距離を飛び越えて（相違に目をつぶり）類似性のみを認めることは読者には不可能である。相違を覆い隠すものの、つまり邪悪な巨人を風車に変えた敵の魔法使いが存在しない限り、類似性への言及は同時に相違をも意識させる。

『キホーテ神父』の物語内でも神父とドン・キホーテの同一化はありえない。なぜならドン・キホーテとの相似関係において神父にとっての参照書物（いわゆる「騎士道の書物」）は、『ドン・キホーテ』の書ではないからである。

‘But your ancestor’s books were only ones of chivalry, surely?’

‘Well, perhaps mine — in their way — are of chivalry too.

St John of the Cross, St Teresa, St Francis de Sales. And the Gospels . . .’ (36).

この引用に示されるように、ドン・キホーテと騎士道の書物との関係が、キホーテ神父と聖人の書物及び福音書との関係に相当し、それぞれの関係の構

図が類似しているわけである。逆説的に見ると、神父が『ドン・キホーテ』の書を参照し相似関係を確認していく旅は、実はドン・キホーテの旅とは類似していないこととなる。

ドン・キホーテが、実際は異なっている現実に騎士道の書物の世界との類似性を当てはめていく行為は、キホーテ神父の場合は信仰、それも特に神の愛を扱った書物の世界との類似性を見ていくことである。（教会制度・形式に対するものよりむしろ神の愛に対する信仰を神父に与えていることは、いかにもグリーンの小説であることを意識させる。）銀行強盗を匿ったことについて神父は次のように語る。

You remember what my ancestor told the galley slaves before he released them, “There is a God in heaven, who does not neglect to punish the wicked nor to reward the good, and it is not right that honourable men should be executioners of others.” That’s good Christian doctrine, Sancho. . . . We are not executioners or interrogators. The Good Samaritan didn’t hold an enquiry into the wounded man’s past—the man who had fallen among thieves—before he helped him (127).

先祖の言葉を引いて自身の行動を説明しているが、後に続くよきサマリア人への言及からも確認できるように、その言葉が“good Christian doctrine”を表していることによる引用である。ドン・キホーテへの言及にもかかわらず、神父はそれがキホーテ的であるから強盗を匿ったのではなく、（神父の「騎士道の書」の1つである）ルカの福音書に記されている隣人への愛を実践したと言っているのだ。

読者が両物語のエピソードが類似していると考えるのは、両者のそれぞれの書物からの影響やそのために引き起こされる現実とのずれ等が結果として似ているためである。神父自身は、遍歴の騎士ドン・キホーテであると妄想してもいなければ、その姿を体現しようともしていない。従って ‘A

Maiden's Prayer' という題の映画は、彼にとってはポルノ（現実）でもキホーテ的な話でもなく、聖母についての信仰を扱ったものと認識される。そして先祖との類似を確認していく一方、ワインを飲んで大いに楽しむ自己と比較して、“it always surprised him to think how seldom his ancestor's biographer had spoken of wine” (177). と『ドン・キホーテ』の書との相違は、覆い隠されずそのまま認められる。彼は確かにキホーテであるが、ドン・キホーテではない。それ故に先祖と同一化しようという見方には、“I am Father Quixote, and not Don Quixote. I tell you, I exist. My adventures are my own adventures, not his. I go my way—my way—not his” (139). と反発する。書物の現実性を表すという同じ性質の旅であっても、神父の旅は『ドン・キホーテ』の現実性を表してはいないし、また表す必要もない。彼にとって先祖であるドン・キホーテは、キホーテ性の記号ではなく、「キホーテ」の姓の大前提。その実在は必然であるから。

キホーテ神父の旅は、先祖の物語のものを現実世界で繰り返しているのではない。『ドン・キホーテ』への言及は、いわゆるキホーテ性の確認・体現ではなく、「キホーテ」姓で繋がっている先祖と子孫の別個の旅の類似部分の事後的な比較確認である。相似記号への完全な同一化を目指すものではないこの比較には、個体間の相違が認められている。同様にその二人の物語の関係も、“Greene's novel is a palimpsest of Cervantes' work. . . . Greene's palimpsest both parodies and updates the earlier story by Cervantes” (Champagne 145). との指摘に見られるように、距離をおいていることが前提となっている。(Champagneはその距離にこの小説の笑いの要素を見ている。) 相似と相違は、『ドン・キホーテ』と『キホーテ神父』との間の距離を測るための2つの測点である。

II

palimpsest で読み解くにせよ、parodyととらえるにせよ、全くの同一物ではない2つの物語、『ドン・キホーテ』と『キホーテ神父』の比較とは、互いの相似と相違を注意深く見ていくことで二者間の関係を考察することである。だが、後者の読みの探索を目的として比較をする場合、前者はその観測点としては定まったものではない。4世紀近くかけて読まれてきている『ドン・キホーテ』は、時代内でのそして時代間でのディスコースに影響され、読みの長い歴史はそのまま読みの複数性に結びついている。

Peter G. Christensenは、『ドン・キホーテ』の先行研究を受けて、“Immediately, the reader has to interpret Cervantes’s work before he gets to Greene’s. He will have to decide on either a “hard” or a “soft” reading of *Don Quixote*” (Christensen 26). と述べる。大別して二通りの読み方、『ドン・キホーテ』を妄想の騎士の奇妙な行動についての諷刺的滑稽物語と考える“hard”な読みと、ドン・キホーテの行動を卑しむべき世界に抗う英雄的なものとするドイツロマン派以降の“soft”な読み、そのうちどちらか一方を選ぶ必要があるということだ。『キホーテ神父』と比較する際この物語を基準点とするならば、その位置付けは読者の選択に委ねられており、不動の評価基準であるどころか最低でも二通りの理解の仕方のある浮動のものである。先のセクションでの比較も、フーコーの『ドン・キホーテ』(この二分法では“soft”に入るであろう)を参照したものであり、『ドン・キホーテ』の理解如何によって『キホーテ神父』の読みが変わってくる可能性もある。あるテキストを読むために別のテキストを持ってくるのは、判断の基盤を求めるところか、実際のところ段取りが増えていくだけの堂々巡りにすぎない。

Christensen 自身はグリーンの立場を、“Since Greene’s Monsignor is described in sympathetic terms, we can assume, by analogy, that Greene is offering a “soft” reading” (Christensen 26). と論じているわ

けだが、これは逆向きの判断である。すなわち『キホーテ神父』の物語から『ドン・キホーテ』についてのグリーンの読みを類推している。だが結局のところそれは、『キホーテ神父』についてのグリーンの姿勢を論じているのだ。この2つの物語が同一関係にないことは先に見たとおりである。数学的な『ドン・キホーテ』＝『キホーテ神父』の関係でない以上、前者への見方がそのまま後者への見方に普遍化され、そして逆もまた真なりということにはならない。『キホーテ神父』を読むために定めた任意の『ドン・キホーテ』は、あくまでも『キホーテ神父』を読むためのものであり、そのことにおいてのみ2つの物語の見方は一致するのだ。

実際グリーンの物語には、『ドン・キホーテ』の二通りの読みに戻元できそうな2つの読みの可能な問いかけが、解答の与えられないまま提示されている。例えば先祖との類似性が指摘される神父の書物への態度、彼の場合は神の愛への信仰は、次の二通りの見方のうちどちらととらえるべきなのか。すなわち現実から見ると戯画化された滑稽なものなのか（“hard”な読み）、あるいはまさに信仰の本質を体現しているものなのか（“soft”な読み）。またよく問題となる、神父の死ぬ間際の「ミサ」の読み方も同様である。“there was no Host, no paten”の状態、言葉と身振りのみで“the consecration of the non-existent wine in the non-existent chalice” (215) を行うキホーテ神父。そして場面は進む。

‘Corpus Domini nostri’, and with no hesitation at all he took from invisible paten the invisible Host and his fingers laid the nothing on his tongue. Then he raised the invisible chalice and seemed to drink from it. The Mayor could see the movement of his throat as he swallowed (216).

聖体、皿、杯そしてワインは、実在を否定する形容詞（“no”, “non-existent”, “invisible”）の後ろに、言葉として存在している。この祭器の存在／非存在が曖昧なままの神父の行為は、実際のミサなのか、それとも

譫妄状態でのまねごとなのか。この後に続く聖体拝領は、“The mayor opened his mouth and felt the fingers, like a Host, on his tongue” (217). と描写されるが、言葉の上では存在している聖体をサンチョ前市長は受けたのかどうか。言葉によってのみ表される存在が現実の存在になるのか否か。

言葉の現実性という事実とフィクションの問題は、両物語でのそれぞれの現実と（騎士道／信仰の）書物との関係に表れているだけでなく、『キホーテ神父』では同時に『ドン・キホーテ』の書が事実の記録かあるいはフィクションかの問題、すなわち神父が実際にドン・キホーテの子孫であるのかという問いかけの形でも示される。物語中神父自身は、その「キホーテ」の姓に保証されている先祖—子孫の繋がりを事実と認識している。（彼にとってセルバンテスは“ancestor's biographer”である。）それに対する“Don Quixote had no descendants. How could he? He's a fictional character.” (208) のような、事実とフィクションを隔絶する見方が入ることで、この繋がりを物語内現実でどうとらえるかが問題となる。先祖—子孫の関係自体が、（『ドン・キホーテ』の“hard”な読みのような）神父の滑稽な妄想なのか、それとも（“soft”な読みで与えられるような）何らかの現実性を伴ったものなのか、という二通りの見方を喚起する。ここにおいて『ドン・キホーテ』の書の読み方自体が『キホーテ神父』の物語内に組み込まれているため、この2つの物語は非常に交錯した形で結び付いている。

上記のような対立する見方が、物語内に結論が与えられずに示されているため、同様の問題に対して確定的でない『ドン・キホーテ』と比較しても、両物語は繋がったまま共に読みの混沌の中を彷徨うこととなる。判断の基準として任意の『ドン・キホーテ』を定めることは、結局は『キホーテ神父』を二重の手間をかけて読んでいるだけだ。Robert Pendletonは、グリーンの小説に現れる未解決な対立関係に、バフチンの dialogic の概念を適用してみせる（“These dialogic confrontations function in *Monsignor Quixote* at the levels of character, plot and genre” (Pendleton 151).）。

これは、この小説が任意の結論に委ねられている状態を、物語内に複数存在する結論の出ない対話に当てはめた考察である。物語内の対話においては、『ドン・キホーテ』の読み方も未解決な対話そのものである。彼は更に、“The conflict between the serious and the absurd and the tension between fact and fiction in *Monsignor Quixote* find an explicit intertext in Cervantes’s *Don Quixote* . . .” (Pendleton 153). と、グリーンの小説中の対峙する2つの読み方の図式と、『ドン・キホーテ』中の同様の図式との intertext の関係を指摘する。この指摘を参考にすると、全くの同一物ではないが距離をおいて相似関係にあるこの2つの物語の間でも対話関係が成立していることとなる。つまり『ドン・キホーテ』との関係で『キホーテ神父』を読むことは、物語内の対話の解消のためではなく、むしろ物語間の対話関係を比較考察することである。

そもそもここまで頼ってきた二分法に基づく対話の図式は、過度の単純化のそしりを免れえぬだろう。だが単純化ついでにこの二分法のアイディアで『ドン・キホーテ』の物語を図式化して考察してみたい。(セルバンテスの)『ドン・キホーテ』の物語ではその始まりにおいて、ラ・マンチャのある郷土が騎士道の書物のため正気を失い、荒唐無稽なフィクションを事実と信じるようになったことが、その終わりには彼が正気に戻り、騎士道の書物をさんざんけなし死んでいくことが記されている。正気から狂気・妄想状態を経て再び最後に正気に戻ってくるこの動きは、故郷を出て見知らぬ異世界を旅し故郷に帰還する英雄叙事詩の型である。この構造の物語を偽英雄叙事詩ととらえるか、英雄叙事詩そのものとしてとらえるかが、“hard” と “soft” の読みの相違である。つまり異世界の冒険の妄想と現実との相違が滑稽である “hard” な読みに対し、例えば(グリーンの小説中にもその名があがる)ウナムーノのテキストのように「その狂気をもってわれわれを正常に」せんと、あえて狂気へと変わった「大胆で英雄的な精神」(ウナムーノ 25, 26)の持ち主としてドン・キホーテを見る “soft” な読み。この二通りの読みには、その意味付けは異なれど認識の変化があり、当然出発点であり帰るべき

場所である故郷（正気）が存在する。

このことと比べてみると明らかであるが、キホーテ神父の場合はその旅の始めにも終わりにも（位の変化にも関わらず）認識の変化は存在していない。神父と立場を異にする認識は存在しているが、それは神父の世界の外にである。その2つの認識が神父において交差しないこの物語では、双方ともに閉鎖的な世界となってしまう、物語の標準・客観視点とはなりえず、あらゆるものが未解決なままである。

‘You know as well as I do that there *was* no bread and no wine.’

‘I know as well as you — or as little — yes, I agree to that. But Monsignor Quixote quite obviously believed in the presence of the bread and wine. Which of us right?’

‘We were.’

‘Very difficult to prove that logically, professor. Very difficult indeed.’

‘You mean,’ the Mayor asked, ‘that I may have received Communion?’

‘You certainly did — in *his* mind. Does it matter you?’ (219).

最後の「ミサ」においてパンがワインが存在したか否かの議論は、決して客観的に論証されず、平行線をたどるばかりだ。わかっていることが少ない中、ただ明白（obvious）で確か（certain）なことは、神父の認識世界でパンとワインが存在し、前市長に聖体が与えられたことだけである。だがそれは、his が強調されているように、神父の精神（認識）の中だけで確かなこと。この判断を外の世界、他の認識との関係の中で普遍化することは不可能なのだ。

『キホーテ神父』の物語内の対話は、確かなものを不確かにしようとしていく。上の議論中でも断定的意見の持ち主に対しては、“Are you sure of that? . . . I repeat — are you sure?” (219) と繰り返し疑問を提示して

いくことで、不確実さと呼び起こそうとする。信 (faith, belief) に疑 (doubt) をはさむことが、物語の向かう方向である。地理的な出発点であるエル・トボソが、神父にとって故郷ではなくなるのもその表れだ。

‘El Toboso is no longer home to me and I have no other, except here on this spot of ground with you.’

‘We’ve got to find you another home, father, but where?’
(182).

キホーテ神父の2度目の旅は故郷探索の旅である。そしてここまで考察してきたことを重ね合わせると、この故郷は象徴的には読みのための基準ととらえられる。しかしその目的も果たせぬまま、神父はこの旅の途上で死んでしまう。それ故に「ここ、この地点」という不特定な場所しか故郷がないように、『キホーテ神父』の基準は一時的な任意の点である。

任意の基準で出てくる結論は、その基準を定めた者の個人的なものだ。従って『キホーテ神父』の物語が普遍性を否定し、任意性そしてそれに伴う個別性を支持しているという結論も、個人的なものだ。当然『ドン・キホーテ』を一言で片づけることは、そして“hard”と“soft”の二分法ですら、個々の読みの相違の部分を無視した無謀なものである。そんな中神父は先祖と自分の行動を比較するが、彼はいわゆるキホーテ性（普遍化・類型化されたドン・キホーテの特質）の記号に対して重きを置いていない。彼が繰り返し言及していくのは、相似も相違も認めた個体としてのドン・キホーテである。そんな神父の態度に、『キホーテ神父』の『ドン・キホーテ』との対話の一端を見ることが出来る。

III

『ドン・キホーテ』は、小説の起源とも呼ばれることもある、いわゆるビッグ・ネームである。多くの者に知られているということは同時に、様々な読

まれ方をしていることも意味する。浮動の存在であっても、暫定的に定めることで、グリーンの世界に対する試金石として参考にするには有効だろう。しかしその『ドン・キホーテ』との比較で（知名度のかなり低いだろう）『キホーテ神父』を読むことは、2つの危険の可能性を秘めている。1つは『ドン・キホーテ』の個人的読みに戻元されてしまい『キホーテ神父』の個性が無視されてしまう危険。もう1つは『ドン・キホーテ』の名を『キホーテ神父』の個人的な読みの普遍化に利用しようとする危険である。この2つの物語は、そのタイトルになっている二人の人物と同じく、相似だけでなく相違を持った別個の存在である。比較という手順を踏もうが、『キホーテ神父』の読者は結局はその物語に対する（あるいは他方に対する）個人的な読みを示すのである。

ではその別個の物語が、時間・空間的な隔たりを飛び越えて結び付けられるのは何故か。「キホーテ」の名前こそが2つの物語を繋ぐ礎である。「キホーテ」(“Quixote”)という名前は、quixotic や quixotism のような派生語まで存在するように、固有名詞から一般名詞へと変化している。OED の定義では、“An enthusiastic visionary person like Don Quixote, inspired by lofty and chivalrous but false or unrealizable ideals.” となっているが、これが一般化されたドン・キホーテの特質、キホーテ性である。だがこの一般（名詞）化の過程で『ドン・キホーテ』の見方の多くが、少なくとも“false . . . ideals”の表現によって“soft”な読みの多くは消されてしまっている。グリーンのカソリックの神父の「キホーテ」が、この定義のキホーテ性を表しているかどうかは不確定である。ただ神父は紛れもなく「キホーテ」である。「キホーテ」姓を持っている。つまりグリーンは、一般名詞となったキホーテを再び固有名詞として「キホーテ」の物語を描いた。個々の固有名「キホーテ」の旅を、その名前の一致に着目し比較する場合、キホーテ性という普遍化された記号を介してのものではなく、個別のものとの対比でなければならない。一般化の暴力を回避して比べられる際、神父の旅は先祖の旅の全く同じ繰り返しということはない。同姓の先祖のものと似てはいる

ものの、別の旅をするもう1人の「キホーテ」の物語を読んだところ、個人的に言わせてもらえば、『キホーテ神父』は、普遍性ではなく固有性を支持する物語である。

注

本稿は、第28回阪大英文学会（1995年11月11日）における発表原稿を大幅に加筆修正したものである。

- 1 例えばMichael W. Higginsは *The Power and the Glory* と *The Honorary Consul* の神父とキホーテ神父を比較している。
- 2 主に人物像の面で *A Burnt-Out Case* の Querry や *The Comedians* の Smith とBrown とキホーテ神父との比較研究がある。

Works Cited

- Champagne, Roland A. "The Charm of *Monsignor Quixote*: Graham Greene's Art of Laughter." *Essays in Graham Greene: An Annual Review*, vol. II. Ed. Peter Wolfe. Greenwood: Penkevill, 1990. 143-152.
- Christensen, Peter G. "The Art of Self-Preservation: Monsignor Quixote's Resistance to Don Quixote." *Essays in Graham Greene: An Annual Review*, vol. III. Ed. Peter Wolfe. St. Louis: Lucas Hall, 1992. 25-42.
- ミシェル・フーコー (Foucault, Michel.) 『言葉と物—人文科学の考古学』 渡辺一民、佐々木明 訳 東京：新潮社、1974. Trans. of *Les Mots et les Choses*. 1966.
- Greene, Graham. *Monsignor Quixote*. London: The Bodley Head, 1982.
- Higgins, Michael W. "Greene's Priest: A Sort of Rebel" *Essays in Graham Greene: An Annual Review*, vol. III. Ed. Peter Wolfe. St. Louis: Lucas Hall, 1992. 9-23.
- Pendleton, Robert. *Graham Greene's Conradian Masterplot*. Houndmills: Macmillan, 1996.
- ミゲル・デ・ウナムーノ (Unamuno, Miguel de.) 『ドン・キホーテとサンチョの生涯』 アンセルモ・マタイス、佐々木孝 訳 東京：法政大学出版局、1972. Trans. of *Vida de Don Quijote y Sancho*.